

「菊池先生、思い出の「潮騒」」 (永井 遵)

菊池先生は独特のオーラがありましたね。歩き方がまず気をひきます。すーとムーンウォークのような感じ歩いてました。とても動作が中性的でどちらかというと今でいうバイセクシャルな感じを受けました。だから、怒ったら、啖呵を切るような気もしましたね。

一見女性的に見えるけど、実に男ポイかもしれません。赤塚不二夫のおそ松君に出てくる髭の濃いオネーに似ていたかなー。

いつも顔を少し上向けてしゃべります。チョークをつまんでゆっくり丁寧に曲線を描くように板書します。講義はちょっと甲高い声でボソボソしゃべるので緊張感がないと睡眠学習に陥ることになります。

ところが、ときどき教科書やご自分で用意した文章を朗読されることがありました。このときは、教室中に生徒の期待感が充満しました。菊池劇場の開幕です。いつも朗読を始める前はちょっとはにかんで、それがかわいいという女子生徒もいたかもしれません。なにしろ読んでる本人が陶醉して読んでいるのですから、まったく菊池ワールドに取り込まれてしまいます。

なんといっても三島由紀夫の「潮騒」です。

雨の降る休漁日に監的哨で初江と待ち合わせの約束をした新治は、嵐の日、先に到着し、初江を待っていたが、焚き火に暖められるうちに眠ってしまう。ふと目が覚めて気が付くと、初江が肌着を脱いで乾かしているのが見えた。裸を見られた初江は、羞恥心から新治にも裸になるように言う。裸になった新治に、さらに初江は、「その火を飛び越して来い。その火を飛び越してきたら」と言った。火を飛び越した新治と初江は裸のまま抱き合うが、初江の、「今はいかん。私、あんたの嫁さんになることに決めたもの」という誓いと、新治の道徳に対する敬虔さから二人は衝動を抑えた。」という場面だけを取り上げて、本当に小説中の入り込んだように読まれました。

今、考えるとこれ以上になくエロチックに読まれたように思います。特に「その火を飛び越してきて」というセリフはしばらく頭の中にもありましたね。高校生にエロチックを教えたかったのかもしれませんが。当時の高校生には刺激だったような気がします。

いまの高校生を知っているので、ほんとに高度な授業？だったのかも。何しろ朗読は楽しみでしたね。もう一つ、あの当時何しろみんな生意気でした。僕がそうだったのかもしれませんが、菊池先生の解説が気に入らなかったのも、つい解釈が違うのではないですかと授業中に言ってしまったことがありまじうた。今考えると紅顔ものですが。

菊池先生は「ふ ふ ふ・・・」と笑ってしばらく黙りました。教室中シーンとしてましたが、みんなそれで納得して、授業はそのまま始まり何事もなかったように終わりました。菊池先生の ふ ふ ふ笑いは不思議な笑いでしたね。」